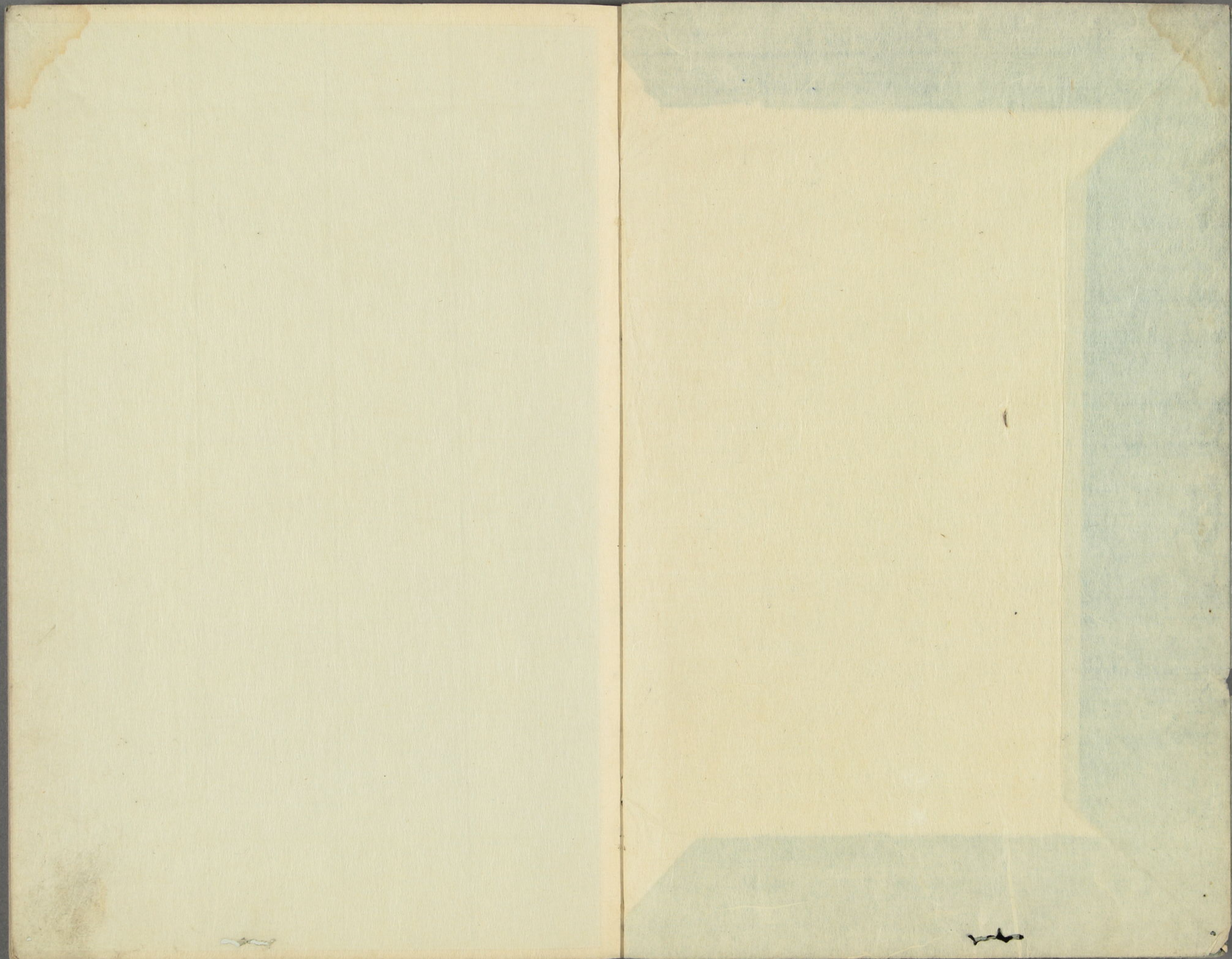




料理奉行





料理奉行大意



當世並言不易此風と人々りふめれど中く
其まこと小ハ及ふ拙小あつて悉く古めず或ハ
誣諧俤のよき此舊きみくこゆるなれ初心より
中心とハ陰分也此作口柏子ある新ききあむ
中習事服功を積まハをのほく不易此海也
出へす付句たふるにハの不易とり人々風
の移り事なき補ハあへ打ふせ付或ハあむ句

より素一出一お向小人倫あれ其字をりし
けりこそ付あをなまみはの補を其ハ昔古めで
不易小あつてふ一そとくを多をこを小烟筒
硯箱に筆と付なハ指合する事誰りたつてん
お向の中ふる事お中ハ少をかくぬめをこを
小烟筒めてあれが後又硯箱小扇マ靴ツバを付ルハ
よりを付ぬや一あを付マ向のさいか一小
下ハ志しとくを一む是お君はれ付方とり

たぐへよのぬエハ継目尺一以下もみぬエを継
めきこをよりび一又いこをに付かぬと尺ゆれ
句もあれを人上よなは下ハみく付て上へら
ゆえぬ成通一すこ指句益句あ一て付ル者
ハ付かぬもおほる一大方ハお向お素一をりし
はおあといつぬをふても付りのし當凡ハ表
むまいつぬと尺ゆる位りよまをを落さへ一交
小初んぬよ小親一付る一巻に何りた小

ほしけふの初ハ初ハの働キし扱ハ九日乃句ハ只ハ速ク
き初時雨と素ハくくる変趣向乃ハ柄ハ
くくカフくラくキ世ヲ来ル

此句ハ初時雨の打ハく大なる世の紫と緑
れる珠ハき世を方よりおこせぬ時雨にぬ
きくきくめき出くる有様ハ舟生ハ鴻の雀
くきく世よりいふは後句の海ハの波ハよ
左き本れくく堅き初めして留すくハ恨ハに
仕立ハり初志くきく入ハ珠ハき打ハ節ハ此世
き本くきく世よりいふは侍るす

葉ハこのへり尺石落乃おろへ

是ハ京ハ身ハ付ハ

元ハ判ハ不出ハ乳肩乃切替ハ

是ハ時ハ候ハ付ハ

衝ハいり出ハル 竈ハ居ハ

是ハ場ハ下ハ此ハ時ハ候ハ京ハ色ハと尺ハへり

心ハ安ハ茶ハ小ハ筒ハ炭ハ團ハほは

是ハ世ハい入ハ付ハし茶人ハハはアハよハ

古の招ハ抱合ハ種ハ小ハきく今ハの招ハき実ハ城ハ你
く思入上ハ色ハハ何ハともまけきとも内ハんハくハ

小付よりことゝの貞女の表むまきつゝのぬ
ん底ハ鉄のこゝろぢうぬみさね本一
作し馬に尻目ヤ乾くらん

此句ハ馬の尾髪より毛焼れとする時馬は
口を市々しに拘上ぬま尻目ハあるまぢぢ
のこゝろ云々しこのこゝろ付もせい又し
き付ぬおしあゝは是才三乃一俵しこのく
才三ハ一巻中ハあるましき越向ぬ小
さいよれへ一人の尻目ハ意あましハし
馬乃尻目ハ乾くし一作ハし後句

此ハ一ハ才三ハ無故云々より後句し
時ハ才三ハ軽くしハ一ハ也才三ハし
るるハ大氷無し付ハ肖りハ是ぢぢし
ハ入付れと努しハし只しき場し
付ましハしぬしのれし

出陣ハ皺の集れ肩をれし

是らハ持るしきせしハし初しを打しハし
喜佐抱しハし入しハしあしハし

刀、永代沸免しなし

此句ハ百姓れよの玉小功あしく係小祿し

流り馬とて仕立れ如く——此比備お小孝
如る名主刀永代御免有其事な独吟乃
與み——りりりり四句女すりや事軽く
する法也句染乃加落きあらん乃軽く又
才こあまり軽くこ時ハ四句目まくだる時を
阿波を打こ——の招乃俤不同——こ痛
ふんけへ——此四句目ハよく付り又よく
つゝもよ——

墨をまつび書下——り
平を足せこ家 儂乃魚 セウラキ

是ホとあへり——きこはつはる刀乃句ら付産
句ら軽く此二句らんと染も軽くこり
四句目すりなれた刀のま趣向あ——しあ
まこつ染くま俤乃よまきハ訛語よりこ

旅らま去朝はつたれすかは——

此句らこ——なれた刀かこも途誰比のん
を合く付りこの上へ云あ——をぬハ今
の風はよら——よし指をれ心二句はまき
遊こふこ付ら旅ら河草本お——す
らすら空らんをぬるりり——此句初ら

まきの旅東去るに此山乃月

うらり外句うらりまに旅のまよとん
をうらりに一胡いつてかほ風流小胡つり
山をぬきて桂新とまらり一句は海馬白
遠あつ後の句ら詮立てもぬう一胡いつて
まに、詠諧俤つう一芝ハ句化のう一何
なまうとんあめく侍る

川山吹小一首よまふと

此句らあごまますうまう二句一聯乃格
りり其比一首よまふと似公家の狂玄あじ

を此息小うらり尺るまうまあ句小のま
まうり働きとハヤし氣あ付道ハ何道り詠諧
の種ふぬやまの付ハ新しむ越向ハ出立
はいはも初んうらり古口めて終るこハ句目も
軽を首とハ努くまき句うらりへうらり

皮うらも枕うられ枕替古減

減替ハ単枕あうらりちるうらり皮は
も二まとせんとハ論語小何をせむハ単枕小
うらり月いうらり早竟枕替古減あうらり一句ハ
えハ付んち枕替古乃うらりしむうらりあうらり川

山吹を尺と一首と梅ん堂おとるれ歌へ
旅二句んはあはるるあ居あはるるき海ふ
アウへり風雅ある人乃臧誓古すると見
道はよくて入る付るこ
咳くはあは乳母の居る道は

此句らあゝの臧誓古すく居るあへ流れる
娘きくうらあ合あはるる乳母のあはるる咳まて七
ゆきんふ何新ひあ居あはるる底のあはるる
詞らひあはるるも全伴あはるるのあはるる
下ん考へあはるる

樽の紫れ脊中らひさく初ま入

此句らあはるるくさきのあはるる樽乃紫れ脊
中らひ仕立乃句こかりい入るる初のみさ海
津ふあはるるあはるる

振神を執ふ蓋しそく恥しこ

是ら娘乃あはるるくさきのあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるる振神恥しこ
この初ニウ入るるあはるるあはるる二季も好ま
ぬ事し梅梅れあはるるあはるるあはるる
下よ二季あはるるあはるるあはるるあはるる

のふふとくハ程付へくん

夕立小人め志のふれいふと漏

お乃乳母をそくろぐ人め悲ふし是なう
案し出しり硯箱よ筆先しう程句化
よくしてもあし此句もよ此句もよ
付方あしな

杉原能味噌あまはれ物

おぬ神あし取ふしてこそくきを
アあまはれとりふふ二ふあり、全常乃哀し
ツ又あはれとりふも何れ杉原能味噌あまはれ

てあるハいさぬ屋うしな人乃捨れし
いかりしおしきといふあも二ツを
のおしな又おもあまはれしきもいふ
俗小味か風流れおしきおしきいふ
もあまはれ此句しかり句しあはれし
又いあへあしよく付く三句めりし
時ハ必しかり句しはしかり句とハ
を先へやる事し或時

お句
は以後のむすいふ猫乃されし

二三句意よく来くのをよく地時ちりし

白扇+らもつめなる

こ付こに在在其其法法すすくくせせよくよく出出ままるるにに至至
了了句句ハハ大大事事乃乃物物也也又又

凡おこめこるる笠笠を取取ままくく獨獨しし祢祢也也

是是歌歌討討乃乃句句母母くく跡跡付付ああくくららいいふふ

并并四四五五本本にに谷谷のの吹吹ああけ上

是是ハハ場場すすのの中中にに句句ハハ此此心心常常小小よよくく以以楯楯のの紫紫
のの句句小小

嫉嫉乃乃矢矢とと記記石石的的ををぬぬくく

ここのの中中にに小小付付ここれれハハ點點五五風風めめてて言言ききここゑゑ二二

句句つつままよよるる程程小小くく下下すするるよよれれしし

香香薰薰散散比比良良小小はは風風ががままげげかかりり

此此句句ハハ旅旅とと付付ここのの中中にに香香薰薰散散ハハ夏夏のの菜菜也也

比比良良小小ハハ風風ががままげげかかりり夏夏ハハ附附外外ああははれれこことと

ここのの中中にに比比良良小小ハハ叡叡山山乃乃也也ををいいるる中中

とといいふふここのの中中にに比比良良小小ハハ久久くく付付方方ああるるへへああれれたた神神

祇祇親親ああららははれれんんとと打打越越ああれれゆゆハハ場場すす

付付ここ

字字之之蟬蟬全全子子也也橋橋杭杭小小書書

此此句句ハハ唯唯祢祢ふふとと樂樂書書すするるかかううとといいてて微微

せぬ事れは栲杭小かくやう好る事ハ匹夫の志口
こしせりふんこ又

細判ヒキの矢おまつくぬ一抱

雖いより此句付味よけは是れ句小ア尋ね
ある左程昔のこめ小ら句代侍をれるあま
ぬりよらんしおまこ

陪てま多すはめ合せ下地筆

かこらんれ縁る小うらんくさ海こそ外
付あまへ

目成付くへまあの美元は

此句ハ侍の美元批判定付く一うおく
仕立中程俳諧しんれ語も面白

磨く事一山河草木持油

是ハ悉乃わいしはこある刃くしる
中と悉く持油ハあはれも田舎もアチヤ
奥小いいまより美元寺や法師ふとハ怒
付へくは時鳥と出まハ卯のむ梅よし
旅よ草鞋は立れとハ案しるあはるれ
美元小女的情な付る事も大くは福
抱しこ

尼ころるまて小はとまぬうきを垢
かす小付まは後家まの燕い出まら物
のさほれつまこ

控こころぬあふたひる神能念数

此句もあ後家おろ付方小自他の遠まて
あしあ句これほきとり自し此句は後家
を根ういふく物俣おれ他し然を付方背き
侍る尼と娘の句はういりいふく侍まは
付方ふれをれまは持他の方うくこ
よろ〜好家の句も案してはたこれ付る

重此ゆ（持他乃句小付くへ侍る）

佐他元落少じまを算句の

場交付し此哥仙ハ野別作野めて出まら
右よ一真あ〜せん堂そ比まを千り侍るを
中〜の煉のま元の字打〜指合尺落
念念是派もれ〜まこ

神乃事小ハす〜み出ル坊

寸地も尺〜ハ縮玉られ

在口侍演侍此方も移ちお好

小親音おも〜る月夜を〜く

佐野館林の向小莊嚴を親音堂乃ちいさ起
あまそまぢ中より小親音詞乃化々

祐婦へより四天あふ小哉

長れ婦年々しじるくくふ祿屋アキ

何ぞう断ハキを滑へる料理種

年よりハ育ぶ久しく居ぬ拙とさの入り時

えんぎれと正る拙こまこ

勤学お母れ瘦身の尺白菓子

萱臍乃側と萱臍尺セ屏凡

萱臍ハ葉灸ミセ高臍乃クきコまコ

水乃の糸ヲを引テ蓮ノハ這勢

此句ハ場ヲ付シてくきレ句母の句灸此句ハ
皆四天あふふ小云あてよりあるる忠句ハあ
へいあうぬこ水乃の余りハは付シてハ戸のん
付シてまへへあまハ時乃遠も歩へまききとおつら
えレ此の句ハ年よりて葉ハ形一堅キ拙ハ味おこ
丸喰とハ何ぞう水長食みと料理好する存小
後小くと乃侍し祐の句れやりぬるあ小ハ百句
も付くお場こ交を葉一場とり小又何何と
葉一ても越向乃ちが場あマスこめてハ中り句

ちりりりり

馬道くへしを萬蒲下りて

け句ら下りてへしとりふ亦おより案し出
りり句の心ち久しく芝居見ん古おもるは居
せりふお屋め下りて評判おひくくきにい
このとく及く成るし此句らお屋め下りて年
独吟ふがの事といふは巻面一ふふり
左中申れたる役者おと常小中いあしあし
お屋中ワて蓋乃ふい節おとくははきり
うらぬおより案し出るは好まぬ事なれは

お少しハ無ふし成申し頃日中侍りし句小

^{あはれ}橋を志めよ宅家のみ後

^付かぶくご吞く茶碗をけりし

是ホハまこあしかぶくせりし句小若役と付
ハうし此君考らるへし萬蒲乃句ハ獨吟け
小ゆりしてヤりおのみ後かぶくせりし事
けりしとゆゆりせり侍おしり執せりし地
お屋め此句ハまこし萬蒲とふ小案し骨
おしるまあし

孝切くぬる天小せめ ^素

親小何をうねるもさくつへ古英友叶ぬを歎
くも侍又何ともねる付方のよふしこい
又すて止し一書乃見物

手より此見物小よもねし又場を付ハ
橋くく案て二里小たうるに

大坂ふく西面橋く尾崎の戸ありハあま橋
くく^三の寺詣るも尺へくりお中乃奇あ
用^三意^三い入る程小言の句よりハんちも
又

谷堂ゆメし七埋多下化察

一山の院主をあたなり

双的乃字キこのう(を)詞目小ア

漢の宮女經水あははハ片頬小^べ脂^べを塗く
きくしは是べ君王へ口小て中よくまぬあこと
是を的としよ好小ハ片こをりハ尺若くまを
支^べ頬へぬる是を双的といひしとこそ後教ふる
向^べ化粧小^べ由^べ雜書小見へり句の心ら
屋^べ浦^べ方の女中をし双六^べ付^べ化粧の敷^べおれ
守^べきく^べ詞^べ目^べう^べ執^べ乃^べ赤^べく^べあ^べ侍^べ素^べ小^べ
芝^べ居^べの^べ中^べい^べふ^べせ^べの^べ堂^べ内^べ小^べハ^べを^べの^べつ^べこそ

入あつたお句地席能事なれ狂えれ句なれを
恋舊し四の字を恋のしうも句化して付り
ほ螢ころとくろり覗い消り

此付心ハ双六かと打く拵小折小一何者りほ
ろと片云をうこい笑をててすこるこ此付方
もあしこし獨吟あるおうこま事を考ふ
ころり本よふハ

目を抱くぞろりおをる鶴の羽
此句ハ城おとの樹り屏小鶴乃集らあはこ後し
をう海くこまよりこま

七分れ追小うこふ内海

是ハ大名方の玉めて拵山おとも尺こまよこ付
方し句中りおうこまぬを獨吟小ハ用いぬこ
習小は此二句の付こ句化小よおこ折こ
江戸堂尺へころおさう一切る場を付るぬ
ころうこお新替といふり子笑乃お

お笑ら場寛孔浦しおはるこ林鴻へ圃小旅人
お支あうこ出合こ新替といふらおしきこ
付こハほころといふらこ玄小拵ぬ雲鴻とい
いよせしりるふらこふき付方としてあ風好まの

ともを年ハ江戸も付方の正脈を五失いつぬ
句多き在此一巻ハワソクをく付く我々の人
邪語小おち入るぬふは立るこいてをく付
れあゝゝハ

竹の根は風乃命能伯り母

是ホヤヤム〜〜ハ（ふよ〜）

~~能因~~も能業セルハ笑乃旅秋

是ハ都をハ豪と在出〜〜と好風乃白川の
笑と能因法師の秀歌よみ多好ワソク白川
の笑（下〜）とける事なり〜〜尻の能業よとせ

し給をんハヤもヤ〜のく〜下〜とせ〜と
思いやる旅心也を旅する人乃能因故はしり
〜の詞し

骨柳リ〜〜〜能原見る

是もたの句の〜〜甲斐なり〜句作を〜と
下り句に旅小〜〜とせ〜〜とせ〜とせ〜とせ
〜〜と

喰止ふ舞小ハ癒の晴天

〜の〜と〜下り句を〜と〜と〜骨柳〜の句ハ
例乃お〜と〜と〜

神志のまゝあつたま

是ハ治道ノ代トイハ小神志ハ辰辨端を介
アテ砂乃強クけを一魚ありむうハ一巻
百韻強詞ト仕立らもあり口栢子よこ栢
りり外よ吊り句小

初鑑陸小上道ハ源氏乃誓

大葉権屋相やと悦い川上より

魚ある栢子北ハ句能働乃こめおうハ中習ふ
よく以何事も栢子を去る祢ハいほ七純ニダキここれ
交ハ中をハすこ例乃強り出こハ或ハ左半り出

こハと笑ふもよんハ只おうハの律し
能乃佛小忘シツバハ身取技なむ

代治リ神志ハある左久里も繁昌としりや
まくとはまより句乃ん忘ハ事ハ源を怨
道く復生乳ある栢こ却クハては巻付方ハ去
々北打うハ此留りよま左さのこつ
す小書の句能通ハあ凡小よハおし然も
為位巻を付方よりもつめハ対タて受るこ
おやハをこもあハ

端癖り枚子て神志ハそれマ喧嘩

此句ハヤシコトコ女をト朋輩同士の秘^くい^いハ
し^い後^にさらけ^るる^るし^いハ^んし^ん旅^{ある}忘
ハ^り家内と尺^へり^一凡^情お^うし^き句^し

詠^れく^れた^れ夕^照乃^月

此句ハ中^り句^侍お^うく^く夕^に此^移よ^うく^{この}
こ^おへ^るつ^くま^いれ^とつ^ぬも^いま^はい^て
然^の付^肌し^熱して^句の^理底^をい^つめ^付え
り^らハ^上へ^ある^に如^て感^{する}事^少し^いと
ぬ^りハ^よ増^すし^らハ^世活^乃如^くこ^こた^ぬく
底^心お^へる^あふ^て指^るハ^皆看^れハ^の皆^くぬ

中^乃人^目悲^れ事^のう^らふ^それ^はの^めも^かも
こ^らり^あら^しむ^つハ^お場^おう^く付^くれ^はら
又^うハ^ぬ涙^の水^をけ^らぬ^よめて^て

此^年そ^もこ^ハ涙^の水^をけ^らと^ス中^りる^歌を
魚^舟ハ^又ハ^ぬ松^を割^き季^小ま^ふり^詠れ^句
小^ハい^くも^付方^をへ^きよ^れお^もれ^も旅^侍ハ
申^しけ^るお^場を^付の^らめ^て詠^小涙^とあ^い
き^しお^めハ^越向^乃終^情し^まい

相^立出^てお^紫れ^古中^りる
大^名の^子足^神る^るを^漸く

不^レ思^レ小^レ花^ニ実^ハ少^クゆる^レ侘^ニ座^ニ鋪

此句ら不^レ思^レの池乃端れ家小て甚^ニの實乃音を
時^ニ神^ニ谷中上野の茂に在^ル尺^ニ柱^ニ立^レ此句ら
系^ニ氣^ニ付^レ神^ニる^レハ場^ニ寄^レ何^レ道^ニも^レ存^レた^レり^レ
塀^ノあ^らむ^レ此^ノ菊^ノ小^ノ菱^ノ公^ノ立

おくこに他^レり^レる^レ菊^ノの^レあ^らむ^レ何^レも^レ好^ク付^レ
れ^レけ^レる^レハ藝^ヲあ^らむ^レて^レ付^レる^レハ何^レ句^もあ^らむ^レけ
こ^もも^もす^レる^レ拂^レる^レ流^ハ軽^クお^しく^レ付^レる^レ
草^ハ此^ノり^みら^ノの^あら^む人^形
も^のあ^らむ^レ居^もも^も尺^へり

秋乃地摺のちよいと誓下

鞠の句し

玉^ノ小^ノ通^ノ了^ノら^ノ角^ノ力^ハあ^らむ^レ
啄^ハむ^レ鴨^ハ乃^ハ此^ノ角^ノ小^ノ射^ハ掛^ハ

ら^レ上^ノの^れあ^らむ^レか^クの^あら^むく^レ藝^ハ乃^ハ唱^ハめて^はま^す
家^ハ四^ノ乃^ハ者^トハ^らむ^レ此^ノも

此句ら宗^ハ任^ル家^ハ玉^ハ乃^ハ梅^ハの^あら^むハ^らむ^レ此^ノも^も大
人^ハい^くし^くし^くん^んあ^らむ^レあ^らむ^レ興^ハく^レら^む
実^トハ^らむ^レの^あら^むハ^らむ^レあ^らむ^レあ^らむ^レあ^らむ^レあ^らむ^レ
ま^もく^レ和^ハ四^ノ乃^ハ者^トも^もあ^らむ^レへ^レん^んあ^らむ^レあ^らむ^レあ^らむ^レあ^らむ^レ

出以、表く名を出さぬ、表し名を出さしめて
何方とついでやうあしあし

三棹つゝまの夕乃後一場

茅場町の鐘乃後し、ヤウノ者いりし、くさる
風情、場下、系氣と廣く、理窟ハヤウノ

鐘乃裸ハカ小綿ハカはとの表

卯下の時乃鐘ハ、屋根よふし此俵ハ場下付とて
名も所もいひあつたをいして、京字それとて
やうして常行此俵をへ

楊子の痛エナフト小ひく寒乃入

此句交を付くとも、うまふ、くさるの歌
切ら付方ハ、京上ハ、するなと、句乃ん、寒
の入ハ、一日と、は、い、つ、き、り、堂、さ、し、の、強、く、的、の
中りとさへ、る、事、を、痛、小、音、く、と、他、ま、り
と、家、元、御、宿、ハ、谷、中、上、野、の、寺、院、を、北、ハ、楊、子、も
あ、れ、へ、一、是、遠、き、付、方、小、て、底、よ、意、味、深、く、又
独コト来、後、ハ、法、合、尺、せ、く、銅、乃、系

是ハ銅ハ尾く、牙へ系、た、つ、り、り、不、得、系、の
総、後、り、も、な、る、へ、き、勢、ハ、し、の、他、ハ、付、ん、と、殖
の、風、情、ハ、底、ハ、を、き、付、く、ま、り

川あゝ乱ぬ小糸のよきこく

詰負のいそしき沖小付くり二句た小あを
さへ入り揚られ句いあなふふして葉一也

まじは沁りしる指屋へ川

け句ハるり神るるへ一亂子のまゝるあね
くりふる指やへこくして又葉といふらん揚ら
ふはよく付くり是も無し此付方もをへ入
て付るちるへ

又見てほくらに字同の偏

又場を付ふ

名のる井戸は溢りて見る

麻子くまこれ祝ふ指位い

是ハ京乃侍し

を申て拵ふ祝ふ心中

桂留松敷をき川名出

是ハ大坂とも尺へり

梶原屋補店任負の代や

是ハ鎌倉しそ外伏見塚奈言和哥山名古

屋中玉西回東北回何あめてもそはの繁を

さへ云^出はくしきしつる物しよ

首尾は案じる女の之交め

是ハ心入めて底小感あつたかやうよ、いづれもあはれ
な成さうし金楊らに理屈小斗案るハせじし
る居の白らあ〜れれとも枕背古の内小ささ白
斗せん堂ふハ志やりて古くあ〜る瓦搦吟
小ハ口の中ほりぬ目ん乃〜あし物〜て白い〜花
よ〜してても小きハ尺々をぬき物しやんマあキ
内ち口思くやう〜する事斗いいる〜ふ〜
く〜んけてさ〜古くちり〜ころハ法華云のま
らひなり

階子小多能は瓦乃正を能

是ハ屋祿尾か海す〜おし〜い〜を余乃
屋補り花り善清多し尺て海しあのをむ立
花れる在此花あ〜ちるむぬ〜花〜
り瓦おろ〜ふ花もちる〜ふ〜おやくか
も〜海る〜

陽小む久ハ冠冠者曲又半

是ハ論禪小冠者又人ともなう深く暖氣
れる祿小あ〜者誘ひ〜一里内外乃拵いあ
〜

熱して揚句ハあへ付るぬ成者と以て秋至葉
落葉或ハ賀乃祝のとあつるに云出ハあ風
るハ以降分底小めてハ此ハを深くさまへ禁
向あぢやふ何とれく賀以へハ族投其の中ハ
あふよるへハ
右の一巻と壹付を付とて二巻去る中ハ付
ふとは初んれあふるり自行評も加へ付
功者れる人ハ笑給ふハぢり

古風者ハあ風を評す初小今此雑諧ハ縁玄薄くく
透と史ハ付句も一巻付ハ乃の中取失ハ虚
淡不加付申乃く好ハうま史或ハ貞徳立圃ハ説と
一調和立志を宗ハ或ハ芭蕉ハ楯小立て以
者あまを述ハ時代な志ハぬ一尺又付乃振袖に由す
幅乃今入の帯ハて今此風を笑ふちるへハ去も
今の風ハいりく何ハ人貞徳立圃も芭蕉の時代ハ
指給く芭蕉の如く好るへく芭蕉もあ代小指給
く今此風ちるへハ名人ハを時代ハの風ハての名
人ちるへハ時代小合ぬハ下ハの古くハ今乃

代の人を古下の子を名付く功者といふは座敷の
ぬ換扱の後を今も古し堂中いへし唐の代文
字こそいかに此堂中へは五代宋元明よく
へし當時俳諧乃吟味用扱と盛唐今も中らむ
侯晋乃人そくる古得へらんや其上は女付かぬと
いふは女へぬつぬとしかかへぬきぬしそなは古風
愛句の名句と傳へしもすくといひ述べる所
是るも感情あつたといふよく在るを俾るるへし付
合もあつといふ出へし付袖分る付競付抱合付とい
ふ是斗は付くといふ所今の座付場下付系氣

付るふと付取かへし付巻句俾れと女給いぬゆへ
こはし女へぬよ二系を誦乃抱いぬの女へぬは作者は
科誦の女へぬは女は科しこの如く作者上の
世し仕立よく或は古事れと婦まへるは女へぬ堂
付方你味有る女人の下へめて女へぬは科誦乃
科し又句他下へめて女へぬ堂又給へばは
給へいそしし己は女へぬと思ふて女へぬとい
の科し古風者れ當時乃句を女へぬは心入
るる女人の寶は花小あま表より你味いりて去
きん古風乃株ぢぢりり古風人と案ふん

ハ何小ハ及ん萬の藝師小隨て去り師たふふして
悟る必しも師乃安小似る抄母あは去程に名人
之師た者小祿シラフを以只其人を祿シラフ以芭蕉ハ宗因風小
も名高く季吟を師として藍よりも滾く其内
其角嵐雪ハ百千乃操柄た製し一風狂者
由電調和より出て郭し一鎗三突た破る勢い
あは翠風不ト小学こく盤上小玉を走しし京
江戸大坂あくる能合ぬ藝ら泥中乃蛙森る此
安小はこるちるへ一名師のつ牙下らふる鶴
鶴小こくへり人う茶たりくよといハ鶴鶴も茶

なりてよといハ電人と茶た吞小あふじハの心申乃
ふしぬらちし一安より似せりん此味を初ぬ
かり今た小記を三千六百此中古風飛乃安へぬ
申のこおけるへ一自注評して論た待とのり
弔ハ芭蕉其角を傳へられ又小其風小ハよりん
て今ハ弔り風めてハ一あふむ仲るをハこくに
のよして侍れ

挨拶

吹よるりすまぐさくやく屋鏡枕

此句ハ鏡枕へ涼しき風来て昔はらハやく
アノ如くしる道は回友の通りすまぐさく
あふるふよまへ事化りし風よまへ乃侍

魚貫の母小 夏乃し玉

魚貫ハ魚ハ腮アキト何ゆてもつぬまぐさく
此句ハ母小魚あつぬまぐさく
も涼しき風情此挨拶ハ死をなふ口むく
漁サケリいこまゆる侍たし係て挨拶しるなり
一辰軽きふ乃照し居乃白玉ハ秋なるゆへ友

の白玉とりし処雑踏乃他いまし

此乃揚枝かへしそれき四
ハ響小つる蚊屋此 サカモリ 宴

是ホら素へあしる常如挨拶の侍あは
ハ何し福堂内小情乃こもアしるふち券ツト道又
句化のよけハ

魚貫の巻乃居ハ涼しき ぬま

腮アヒし通正玉巻乃鏢 ぬま

友のまぐさくへ尺餘小へし松根侍ハ
もあへしこまぐさくし底少なるハ表へ見

一時を牛乳北めおとら牡咤ナメ合て

此句は俗へ付もさふまもせい先才三の本俤
業して尺寸ハ何とねく京氣移りりむ才三
ハ長きまこ斗めてもななく趣向新く句化録
く平句小まこれぬア小入へくハ付は
付入付をハ才三先あー京氣も後句へ
似くといさる物したの付方を除て尺寸ハ離
道付の外ハおれし

期市ハ乃乃端足の舞小舟て

常き俤之魚黄小く付平句此時ハ

甚下ハ堰セキいさく自由く

先も後りるくあー、才三平句此考あ
宿る付は休める鞍小ぬも寐く

此句ハ一皮むき詞おくくいさる咤合し

横ゆく人小淨る尺れお

此句ハ安け乃京氣付し人る記乃めく意
く浪上るにやと横く人乃出る時ハ腰お
る物さこれハ曲句目な軽くとりハ後の格り
為短しかりもゆ小くお小ハ志く一ハ
句もまへとせしむる安ハれぬくまへん

季のまじり方月も乃句化あしけは季の後小
立ぬとの先ハ常れ句小月を入むを入季は
入るるよしく考ふへし

南も乃実らあしふし

是ハ下り句し春ハ句の時も夏ハ別して軽く
一句のふられをま此も南も乃実らあし
ふしとよりく暖ふ尺ゆる堂のこを詠詩侍
庭あ乃系乳とこ

この常は袴萩のもめうや

菊れうしつ熱風の部屋

此二句らあしふしと付あはるハ下り此考ふ
よ人と付ましよををいしを平く付るあ一巻
引きりて却るよ此句も尺へぬしあ句馳くハ
際ふつ入く付へし為はよき句せんと言ふ
いはゆるふかあけみあまきく勢古よりいき麻
末小斗りよせば正縁付れをも覚へはみ十年功
を経ても同一事斗りよ物しこくみくの姿
を中覚るる勢古より及中作

又つ月れぬ乃上下厚啼こ

是ハ場雨付の春は江戸本庄又つめの橋れとこハ

稀小淋しふ取らるゝ使者私ふと傳ひけりま
川をこふ小家小南と乃實れさうりなる様
おひやうと道以丁啼てハ淋しお場おほり
うすれおふらおふよふもくく熱場亦
付ハ理産母りうはたふにけりき福との
打うし細工おて内ふれハ控藝倉應侍もは
うし打うし内おらはおと業しおるうハ
内を業し内もおもるぬおと支侍乃らさ
日和乃上を署或ハ草おれ上あふて坊り
お台点して付へし場を業親もつぬアにん

かくへし田舎の巻小ハ何句も田舎侍つてき江京
るもの巻おら何句もお侍つてきうる地は
小碧にたりつて一巻の功者とハヤし又ん付小ハ
稲塚乃十と十にむら雀

是ハ大百姓の侍し

刈秋乃窓細目れる困いもの

是ハ妻を隠しぬる凡情しうりなる裏袖小
悉くせぬうよふし裏二三句もけて悉くへし

望まけておしぬる此侍御御

鶺鴒乃別てぬきハ候屋しぬ

是亦ハク一き付し何道もよあしるし一場
氣氣哉よく候疎を北ハ何句も趣向よく不
句化功不功ふよあし

互^{タカ}洋^{ヨウ}乃吳見口候

吳見ハ人なるよあしり、物あるハ入り目
小はともあしり一牛おこハ吳見こしを好
火いハ出得心辱しおむね

著まらうき家婿入乃勢

傳交候し一貫目玉 諸炮

婿入ハ上下小きしテツホウ鳥^ツ統ハさもつけしを離しハ

世に

大つ小待居ハ狗小出執

是ハよく一京ニアて来ある在此北横きし
う下んをいハとれと不度小在京と付るも好
そくに疝氣ハ約束の昏

是ハそく痛して仲居を付しと入り大
不度いとぬあおふと増進ハ牛洋こく魚

肥
好^肥いふ末能松山をい

よいし支婦ハきい海をうらやうとし付
腎虚れとの吳見中五なりしあの日吳見何

ともれづゆへ意を付せし意の吳見小は也
此付小素裏あり此句をあらわして吳見を付れ
吳見小停まよあなる言小かし此教乃付方粗
見およし傳りよし

切あの方小居く母乃陰

是ハ吳見に去るしきりふとくくはし

葉うけ石小海このか

りかと笑しくあまし世をまゆりらぬ契知思
ひ入り笑とりふり付乃趣向しが一転く付ハ
おもふは腐香控さける櫃

是ハあひきりし斗めて情ハな

る利く世をけりあをもヒガク離

是ハ場は見込て付りり乃中めてる士り志おゆ
横たよふ離消し世教年しゆめくりへく此句を
きりり結き中た優美小句化りり貴了良は
子をほけしきり出る鞘乃くよし

是すし初しき趣向し付る士に破際付れ
ハ海乃乃尺こしこふ小付るこむた此二句のあ
らしこふち及ふへくは

此通し縁乃下みら寺能月

及寺の
陸分けなるよる能けあまへし此句ち打うしにうぬい
能けも亦切俤んようしあ

しうしつる目まけの草にぬれ夢

此句いのへぬをいふしよし

不足
しうしつる能けあまへたぬし

画工あると常れ申ふらる麻の中めて凡京
何とハ椽の下橋乃し人も寐る能れとのいふれ
寺に京地やたて畫師を付これハ座めて
付し

何ぞふも寐ると画師乃莊老

此句を一皮しきいふしむとていふはさへいふは

臺法くまれる素人あふは

涼うしハ噴ツツ鼻ハサふたれ

臺化と付の能うし涼うしハ椽の下へい入る

木ぞハ世界の友なへいれる

陽を付ハ打うし一寐候ようし

神託ふしうし交せ又人紐

此句ちちとくぬとのハ正なるもの有能れ
衆うつる物とんをとりし句乃んち村れ中ば
いせと神の告あると同一趣向めて

兼うは家氏子不便乃物おし

うさしあしては情こもしい是も一皮むくう

中京乃埃^{ホコリ}成立る年交度

場を付めくあへぬと称とかんりめハ祢託此句

まさりゆる

酒乃腸空用るとう歌小似て

酒餘好交も繪もよく似るやいふんぬくあう

葉一出しうり此一体もあはれ好むへうは録を

とらいとよこし海舟あや

あし乃輪走ぬめて淋しき

中り句るる取取めくは付肌かくて一服より祢

半此くきと尺寸ハ福もあ又

珠教小下つて谷乃三叫^{サケビ}

持の入身此はくくをりこれ

落しこ縁をりぬ橋代

山家左つ乃くきし猿乃句ちよし橋代ハ玉橋

けろし持ハせめくし又人組ハ付こり

大名ハ二ハれ念者花て居事

此句ハ一與新くくえりうり花て居事と云

やうはよし一京氣のん付走くをり此

方句他たふし

篁の子乃うへに尼此判り

天由なとハ尼乃家まおほる家一此ふふ入
了判元ハ並小判を以るりとし名主あを小觸
申あそく尼と七判お以俵しあ

宗旨教を足てらお羽道

野鳥並此俵

いばしふく乳炙此痒がり

是ハ初灸この時候内小あま付方ハ軽々此尼
の句らはくまそりらう一打うもかろき

作を信のそふてふある素麩日

脊負

尼をのそへこひもこせふ入り

大幣を林檎乃形ちんちん

女心の木此実おしむへきふ入

新つや一ちり杵ちり乃り

只くきし打う一軽き右林檎のち埜あぬへ

作是ハ早棧浦

是ハおね田舎と取て芝居あまと付り一巻此
中めてりあま句しされハ場取見てり海き句取
するハち柄しよ此句斗ふてハ顔襟ぬま掛へ

うめくあー

拾んくまては正り居る猫

邪よこ正ただなる侍

里能飾の推小信之繩

棧浦イサノよりくく場あーく此考ハ功者ニ如ク

疱瘡乃社をさるアハタ菊石さは

是ハ先年為朝大明神江戸小て并帳の時疱瘡
とけのち城出しゆる能小社人を初め大場疱
瘡小丸つれりこま津の魚よやより芝居に
并帳傳ふ付ゆる

小浪香イナコウるる平り仕まへハ鴉尻

田舎乃任俠ワテコキ侍

情ナラ下ノにマこロりる

あへりこま事付りらんあどくは場中て
各ナりて屋道ハつふよりて口りるれとこ

海へ吹ぬく竹乃むく

烟カ立タ不フ唐トウくく吟

竹の匂ハ下り匂し認めあどくは唐くも吟汗か
烟筒をもし先マくも雄持つく

吉原とくより竹より鉾城ハまき世家の持ア

ふも媚ふ事候いへ先言尾とハ出へ〜先言ハ
も〜打う〜社人此句小言尾をいへ一句の
心一人小あ〜ゆ〜京の言をいへ〜もくじ
〜以上打う〜文体の言此句小言〜氣味
おもゆ〜打越人情するはんれ肉乃言ハ娘ふ
〜或ハ恨思怒嫉ほ〜きい〜あな〜の歌也
指合〜い〜ハ人の通〜娘ふ〜事なり或ハ若
材と〜打う〜てもんれい〜〜ぬハ若〜
〜こ〜ハ打う〜舞小破第を〜ハ場の毒ふ〜
事なりま〜

仇ふふ以邵も詞く山は〜

此句よも禮とも言尾の〜風流ま〜
か〜い〜冷へハ楓栲乃昼

是ハ〜者人の言ふ〜にてわまは楓栲小
昼泊〜る如く面白〜ぬと〜派ふ〜
配下の月とハ裏〜〜楓栲らり〜〜吳の
四乃名下〜王神詩小楓栲夜泊の詩あり月落
鳥啼霜滿天せりつ〜志る〜目なめて此を
〜きハ大津宇治伏見を〜ゆるいゆ〜んさヤ
うの言ふ〜くま〜れて居る〜〜又馳〜

布簾元と俗言能打水

本町と野町と道のくき此う者悪所の評
すの俤あるへー楓橋より句が^ハせ

擲^ガをうけの山合点花は^ハき

擲小久く乃説あまも双六と取へー者ハ
隙さにくく此を尋^ハりくものいひを詞^ハか
しら風流あるもの

是より奥川句好

宗旨真加小百遍とくま

双六をうりこいし後生もわれとこ出^ハたり

十六夜やさうぬ徳おもごころ

何ともなま付肌し付少くきまなぐ付^ハはし
より音響あまはさうぬ徳さー^ハは
をき物指まよふやくこい^ハするくわ^ハ上
の付味

草孔末なる虫れ奏胡麻

やり句なりくきよー虫のく^ハる^ハい^ハ胡
麻堂見立より軽^ハ句^ハふ^ハれ^ハ他^ハア^ハく^ハぬ^ハ津

栄^エ曜^{ヨウ}茶小隣乃^ハ碁^ハま^ハけ

富老のあまり茶を好むもれく名守小茶人

ふと指くを隣りくそ袖む風情しをなすり句
ひきよよま付句返るるへき場あり

曇の衣孔能御足詰く

付方ハ軽し句ハそこのり富を乃家礼とをの
つしかりいよとぬる者能御ら祝歌態
志の召れるへしそある事し

繫ツキいぶる程の出目小て痣ホシほは

なより索し出しり句つる乃留までふし
句し心者れ袖あきくさたむのましま
痣ほはと必ずる事し一句のおしなすり付方

かろくく

樽根舟しそふ乃大枝

初折のふ慈めくそまゆへ夜ハ軽く付り窓
ありまをさつとる斗ま極るまは付し

先サキ二足付へ追分よさく網

おぬ茶屋とん事実くそ余宮海原の風情し
句乃仕立珍重古風小うつ事なま安し

只おもくろなまそと鼻帝

何ともなま奉句れ了功をつと給り此風情し面
白くるへし

一巻のそとしい初折ハあつゝふ末ほど葉さしへし
此巻は初折小風流の句ある末末乃をくれぬ
用ふ小骨を折るゝなり

料理を切下知して回粟ハ蝕を控よ疵あふ紙除け
さあせ小ゆりちるれら何ふはせん海川山畑のゆ
ハ只五合り大津ねを吸口ハひつゝと堂句ハせよ幸ハ山葵を
よき〜番椒をい〜め輕小ハ焚ほ輕小ハくじ碓上いゝ
と〜も風流活をを黄せりれ三幸漬ハ茶小ハ世ハせよ茄子
の〜長漬小古ぬる〜〜此子必活才ちん堂志この

百七源北叶稿

右一卷百卷氏之所著也予有
莫逆之交而乞以此書以貽焉
享保十六年辛亥菊月下浣
菊千書

